

4 年 1 組

火って人を幸せにするんだね ～わたしたちの最後の火起こし～



誰かが喜んでくれることを喜ぶ

図工の学習で作った釘打ちゲーム。低学年のときに動物飼育をしていた子どもたちは小屋作りで何度も釘を打ってきました。そんな釘打ち職人の子どもたちがつくるゲームはどれも面白く工夫されていました。初めは作ったゲームを自分で楽しんでいた子どもたちでしたが、身近な友だちに楽しんでもらうという姿が見られるようになりました。活動の様子を見に来てもらった校長先生にも楽しんでもらった子どもたちの表情は、とても素敵な笑顔になっていました。他の人に楽しんでもらうことで「これじゃ簡単すぎたな」「もっとハラハラするようにしたいな」と遊んでくれる誰かを思い、つぶやきながら釘の位置を考えながら打っていました。そして身近な友だちだけでなく、もっといろんな人に楽しんでもらいたいと考えた子どもたちは、低学年や隣のクラスの友だちに釘打ちゲームを楽しんでもらおうと「4-I GAME LAND」を企画しました。交流する学級に連絡に行く係やプレイ用コインをつくる係、景品を準備する係など、誰かのために力を出す子どもたちがいました。目を輝かせながら自分たちが作ったゲームを楽しんでくれる姿を見た子どもたちは、にこやかで言葉もやわらかくなっていました。交流したクラスの友だちから、「もっとやってみたいほど楽しいゲームだった」「景品がかわいくて、私たちのためにがんばってくれてうれしかった」など、子どもたちが他の人のためにがんばってきたことへのご褒美の言葉をもらうことができました。交流中、3年生のAさんに「先生、4年生はどうして僕たちのためにこんなに頑張ってくれてるの」と聞かれました。どうしてこの子たちはこんなにも一生懸命なんだろうか、私は答えが出ないままその質問に返すことができませんでした。「この質問にあなたなら何て答えますか」と子どもたちに問うてみました。「自分が作ったゲームを楽しんでもらえるとなんかうれしいから」「だからもっとやってあげたくなる」子どもたちからそんな声が上がりました。誰かが喜んでくれることを喜べる4年1組の子どもたちがいました。普段生活を共にしていない人、関係ができあがっていない人と自ら手を差し伸べてつながろうとする子どもたちに私は驚きました。それは私がまだ出会えていなかった子どもの一面であり、同時に子どもの可能性を強く感じました。



最後の火起こし

1年を通し自分の火と出合うために仲間と何度も失敗を重ね、気づいたら火を起こすことだけを追い求めてきた1年間でした。その火は尊く、温かさや幸せをくれるものでもありました。「絶対に火を起こすのはもちろんだけど、最後はお家の人に料理をふるまいたい」と語ったBさん。「うん、そうしよう」と答えた子どもたち。私はGAME LANDの子どもたちの姿が思い浮かびました。誰かのための努力が返ってくる喜び、火からもらった幸せと一緒に共有できる喜びを最後はお家の方と一緒に味わいたいのだと思いました。そしてお家の方が食べたいと思う料理を改めて考え、短時間でもおいしい料理がふるまえるよう今までの経験から料理を決め出していきました。2月14日、4年1組で行う最後の火起こしをしました。限られた時間の中での最後の火起こしでしたが、すべてのグループが火起こしを成功させ、中には飛び跳ねて喜ぶ子もいました。最後の最後に成功させることができて、なんともいえない達成感に満ち溢れた子どもの顔が忘れられません。そして子どもたちの努力がつまった大切な火で作った料理をお家の方に食べてもらい、「おいしいね」の笑顔がきっとこれからも子どもたちの心にずっと残っていくことでしょう。「火って人を幸せにするんだね」と言ったCさんの言葉が胸にさりました。そして子どもたちは、仲間と協力してきた自分がいたこと、火そのものを捉え直した自分がいたこと、火起こしをして幸せになった自分がいたことを振り返っていました。



<子どもの記述から>

・ずっと火起こしをしてきて一度も火が起きなかったから最後舞切り式火起こし器で火が起きてとてもうれしかった。この1年で成長したと思うことはチームワークです。初めのところはどこかで遊んでる人もいました。しかし最後は遊んでる人がいなくみんなで協力して火起こしができたと思いました。チームの中だけではありません。火起こし器をかしてくれたDくん。やり方を教えてくれたEくん。火の育て方を教えてくれたFくん。火は一人だけでは起きないと思います。みんなで協力したから火が起きたんだと思います。(Gさん)

・今までは火を起こそうと思ってなかなか火がつかずに苦戦していて火を起こすのは疲れるし難しいと思っていたけれど、どんどん火を起こすにつれて「火を起こすのって楽しい」という気持ちに変わりました。さらに火を見ていると温かい気持ちになるし、火と言うのはたくさんの方ができるし「火ってすごいな」と感じました。火はこわいイメージが強いかもしれませんが、私は火を起こしてみても、火は人の気持ちを幸せにしてくれてやさしいイメージにもなりました。今回火がついたのは、他のグループのおかげでもあるし、チームワークがあるなと感じました。自分たちでつけた火を大切に育てて、その火は世界にひとつしかない火なんだと学びました。自分たちの起こした火、そして自然の中1から日をつける。そんな中で食べる料理は家で食べるよりおいしくて自然の味がして、寒い中食べる料理は温かくて、火の温かさや自然を感じながら食べる料理は本当に特別で最高なんだと感じました。(Hさん)

・火起こしを通して災害やキャンプのときに使えると思った。チームワークを感じられて良かった。火は危ないものでもあるけど、火は心を一つにしてくれるものでもある。みんなで火を起こして、そこから育てていくことを学んだ。今回の火起こしが最後だったけど、最後はつけられてよかった。(Iさん)

・私は最後の火起こしで学んだことは協力です。理由は協力しないと火種もできないからです。私は火起こし器をやりながら「きつくなったら交代」って言ったら反対側にいる人に交代して火種ができたので協力って大事だと思いました。お母さんたちにおいしいって言ってもらえてうれしかったです。(Jさん)

まだ一度も成功させていないKさんはこの日初めて火を起こすことができました。喜びに浸るのも束の間「やっぱり道具の問題だ」とつぶやくLさん。自作した火起こし器を使って成功させると張り切っていましたが、何度やっても火種ができませんでした。力が上手く伝わらないと感じ、Lさんの火起こし器を借りてやってみると、1度で火種をつくることができました。自作した火起こし器と何が違ったのか問うと、「回した時に力が入るっていうか、軸が安定してる感じ。自分たちのはグラグラしてる」と答えました。Lさんは最後の火起こしだからか、まだ火がついていないグループに自分の火起こし器を貸している姿がありました。その火起こし器を使って初めて気づいた道具の重要性。自分たちの火起こし器と何が違うのか比べていました。ひもの長さや棒の長さ・固さ、重さなどいろいろな視点で考えていました。



何度かやっていれば一度はつくだろうと考えていた子どもの中に、「効率」という二文字が頭に浮かんだのではないのでしょうか。Mさんは「ものすごく考えられて作られたんだと思うと、昔の人ってすごい」と語りました。人力で火を起こすという原始的な活動の中で火起こし器という道具と出あったことで、より早く、より正確に火種をつくらないと暮らしていけなかった古人の生きる知恵を感じていたのではないのでしょうか。その日の夜、Nさんの母からこんなメールをいただきました。

私がいつも通り何も気に留めずガスコンロをひねって火をつけたところ娘が、「あー!もうさあ、こんなに簡単に火つくのにあんなに寒い中で頑張っさあ!でも火つくと暖かいよね。昔の人は毎回ほんとにすごいね」と、暖をとりながら微笑んでいました。体験したからこそ出てくる言葉だなと思い、感動してしまいました。火を起こすことから得られた達成感、またそこから想像する自分の今の置かれた環境への感謝が感じられて、火起こしの世界の着地点が見えた気がしました。

火起こしを通し、自分の暮らしを捉え直すNさんの姿がありました。火起こしという経験をした子どもが、自然や暮らしを別の視点から捉え、これからも身近な「どうして」を追究していったほしいです。